

酔筆(2) 悠遊会という「美術家集団」について

- 1 悠遊会という名称は偶然決まったものではない。名付け親は会員の奥野アキ子^{セン}である。「悠々じゃ、つまらねえなあ」と言ったら、「勿論、後の方は遊ぶですよ」と、この才女は打てば響くように言った。随分、昔のことだが、つい昨日のような気がする。彼女は陶芸にのめり込んでいて、写生会にはぜんぜん出てこない。彼女が出てきてくれたら、淡彩とはこれか、ということが分かるのだからなあ。実に描くのが早い。まさに「走り描き」である。1時間にP6号を少なくとも3枚は描いてしまう。彩色までして。しかも作品になっているのである。
- 2 「悠遊」は辞書にはない。「優遊」はある。くのびやかなさま。ひまがあるさま。優柔不断(新潮国語)とある。半分は似ている。半分は似ていない。「悠遊」は我々の造語である。造語を用いて世間に問うているからには、この意味合いをはっきりさせておかねばならない。どのように定義付けをすべきか。この問題は、以下の想念やら疑念やらを整理した上で決定したいと思う。
- 3 絵を描くとは何だろう。我々は何故描くのか。趣味だからか。趣味って何だい?
人の描いた絵を見て、自分もこんな絵を描いてみたいと思った。これが始まりではないのか。悠遊会展にたまたま紛れ込んだ人が、会場の作品を見て「自分もこんな絵を描いてみたいな」と思って入会した。こんな人が何人もいるではないか。
写生会で描いていると、通りがかりの人から「いい趣味をお持ちですねえ」と言われることがある。果たして、趣味なのだろうか。趣味なんてものでは無いのではないか。趣味を超えている人が増えているのではないか。描く人は皆、無意識に創造している。上手い下手の話ではない。描く度に何かを密かに得ているのである。
- 4 悠遊会とうのは、外人部隊のようなものだ。お互いに過去を問わない。また、問う必要はなにもない。外人部隊と違うのは、お金を目的としていない点とリーダーがいない点と行動を縛る規則がないことぐらいである。リーダーがいないのがいい。変な先生がいないのがいい。先生は自然だけさ、と中川一政は言った。先生は居なくても、互いにノウ・ハウは教えあっている。こんな素晴らしい「美術家集団」はない。「」をつけるのは、自分は美術家ではないと思ったり、思っていないでも照れる人がいるからである。
- 5 絵を描くからには、我々は絵描きである。美術家である。描いた絵を売って生計をたてていなくても、絵描きだ。美術専門の学校を出たってちゃんとした絵描きは稀である。産婦人科の医者細君を3人か4人弟子に持って、大した作品も描かずに左団扇で暮らしている大家もいるそう。こんな連中に比べれば我々は、立派な絵描きである。
- 6 上手い絵(A)と下手な絵(B)がある。いい絵(C)と悪い絵(D)がある。(A+C)が一番、(B+C)が二番、(A+D)が三番、(B+D)が四番であるが、上にあげた大家の絵は三番である。我々は時々、下手だがいい絵を描くから二番に位していて大家をこえているのである。いい絵とは、端的に言えば品格(ひん)のある絵だ。本人は気が付かずにいるが、悠遊会展にはこの二番手の絵を描く人が80%位いると思う。悪い絵とは卑しい絵のことで、一言で言えば品格(ひん)のない絵だ。幾ら上手くても品格のない絵は駄目である。理屈を言っている絵なども卑しい絵である。ある駅ビル9Fの廊下に絵画教室の「先生」たちの絵が掲げられているが、90%まではここでいう(A+D)の評価を与えざるを得ない絵である。
- 7 いい絵(C)は「小学生、中学生の絵に多い。高校生の絵にもときたま、すばらしくいい絵がある。そんな時、本人にうまいことを言ってね、俺の小品と交換するんだよ」と言って、楽しそうに笑ったのは宮地亨さんである。宮地さんは2年前に亡くなったが、日本で唯一人、パリ秋のドートンヌ展で金賞を得た人である。坂本繁二郎さんのように中央の画壇をまったく無視して生涯を終えた。毎年、パリ展から招待されて作品を送っていた。ほとんどが、横長50号ぐらいの鳩の絵だった。どちらかと言うと下手だが、大変品のいい絵だった。鳩が5,6羽勝手なことをしている作品だった。
- 8 記念すべき第10回展が迫ってきた。大いに、下手な絵を出品しようではないか。悠遊会の一番大事な行事が、この展覧会である。世間に公開し、批評を得、刺激しあい、励まし合う事の出来る年に一度の集まりである。全員が出品しようではないか。
- 9 来年6月には、藤岡さんが司画廊で初めての個展を開く。応援しようではないか。大病の後、彼の作品から不純物が消え去った。下手だが、すがすがしい絵である。淡彩画の神髄に迫ったものだと思う。
- 10 くだらねえ欲を捨てて、下手で良いから、少しは品のいい絵を描く。こういう世界に遊ぶ、と言うのが「悠遊会」という美術家集団である。今日はビールのあと、ウイスキーの代わりに梅酒のオン・ザ・ロックを飲みながら書いた。ではまた。

※藤岡さんの個展については詳細が決定次第お知らせいたします。(編集部注)